認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響

藤木 大介（梅光学院大学）　上田 七生（慶應義塾大学）
樟本 千里（城西国際大学）　若林 紀乃（広島文化学園大学）
越中 康治（宮城教育大学）　松井 剛太（香川大学）
長尾 史英（飯田女子短期大学）　山崎 晃（明治学院大学）

英文要旨

The center for early childhood education and care as the integrated institution of kindergarten and nursery school has established. Since the center is the new type of institution, child-care workers are required to adjust their belief of child-caring process. We investigated the change of the belief before and after working the center for early childhood education and care. The questionnaire showed the following three points. (1) The beliefs of the child-care workers, regardless of the child-care experience, changed to more "child centered" one. (2) The belief of the child-care workers who have much experience, especially the belief of the nursery teachers caged to more "process considered" one. (3) the belief of the child-care workers who have much experience at nursery school caged from "togetherness considered" one to "individuality considered" one.

キーワード：center for early childhood education and care, belief of child-caring process, kindergarten teacher, nursery teacher

和文要旨

幼保一体化施設である認定こども園が始まった。これまでにない形態の施設への移行にともない，保育者は自分の保育観を調整していく必要がある。そこで，認定こども園で働き始めた保育者の保育観が，それ以前と比べてどのように変化したかを検討した。その結果，以下のことが明らかになった。1）保育経験にかかわらず，より「子ども中心」の保育観に変化した。2）保育歴の長い保育者はより「過程重視」の保育観へと変化し，特にそれは保育所保育歴の長い保育者において顕著であった。3）保育所保育歴の長い保育者は「まとまり重視」の保育観から「個性尊重」の保育観へと変化した。

キーワード：認定こども園，保育観，幼稚園教諭，保育士

問　題

認定こども園は就学前の子どもに幼児教育・保育を提供する機能を持つ施設として2006年10月にスタートした。保育に欠けるか否かにかかわらず，就学前の子どもを受け入れている。これはごく大雑把に言えば幼稚園の機能と保育所の機能とを併せ持つということである。認定こども園で働くようになった保育者は，それまでに幼稚園教諭や保育所保育士（以下，保育士）として働いてきた経験を持つ場合，それぞれの保育スタイルを認定こども園の機能に対応したものへと変化させる必要がある。そのため，幼稚園や保育所といった設置目的の違う施設で働いていたために当初は互いの保育観や保育スタイルが異なっていたとしても，認定こども園で働き始めることによって幼稚園教諭は保育士のような保育観に，保育士は幼稚園教諭のような保育観へとシフトし，互いに似た保育観へと安定していくといったことも予想される。

保育観，保育スタイルに関する研究

幼稚園教諭や保育士（以下，まとめる場合は「保育者」とする）の保育観や保育スタイル，あるいはその変化に関する研究はこれまでにも多くなされてきた。保育経験の浅い者を対象とした研究としては，保育者志望学生の保育観についての研究が行われている[1)2)]。例えば，梶田ら[3)]は，保育者志望学生が実習時などに指導を受けた現職の保育者の指導論（つまり，保育に関する信念）と自らの理想の指導論に関して調査した。その結果，指導論が「受容的な子ども中心型－指示的な教師中心型」「経験的な過程重視型－理論的な成果重視型」「まとまりを育てる計画型－個性を伸ばす臨機応変型」の3つの因子からなることが分かった。また，現実の指導論はどちらかと言えば「受容的な子ども中心型」「経験的な過程重視型」「まとまりを育てる計画型」だと認識しているが，理想的にはより「受容的な子ども中心型」で「経験的な過程重視型」となることや，あまり「まとまりを育てる計画型」となりすぎないようにしたいと考えていることを示した。また，その実習前後の変化も検討されている[4)5)6)7)]。

さらに，より保育経験を積んだ者を対象とした研究としては，現職の保育者の保育観[8)9)10)11)]や，その保育経験による変化[12)13)14)15)16)]も検討されている。例えば，梶田ら[17)]は，保育経験が11～15年の保育者は1～5年，6～10年，16～40年の保育者よりも「子ども中心」の保育観を持っていることを示している。また，保育経験による保育観の変化については，いくつかの事例的な研究[18)19)20)]も行われている。

幼稚園教諭と保育士との保育観の違い

このように経験年数によって保育観が異なるばかりでなく，保育者が働く施設によっても形成

される保育観は異なる。例えば，梶田ら[21]は，公立幼稚園の保育者は，私立幼稚園，公立保育所，私立保育所の保育者と比べて「成果重視」の保育観を持っていると報告している。また，公立幼稚園の保育者は私立保育所の保育者と比べて「個性尊重」の保育観を持っているとも報告している。一方で中[22]は，幼稚園教諭や保育士も「子ども中心」で「過程重視」，「子どもの興味・意欲重視」の保育観であるとしている。

認定こども園の保育者が持つようになる保育観

以上のように，保育者の保育観は経験により変化し，また働く施設によっても形成される保育観は異なってくる。認定こども園がスタートして間もない現在は，保育経験が認定こども園に限られる保育者より，幼稚園教諭としての経験を主に持つ者や，保育士としての経験を主に持つ者が多いと考えられる。しかし，認定こども園という新しい施設で働くようになることで，子どもや保護者のニーズが変化し，それに合わせて保育スタイルを調整していかなければならないと考えられる。自然，それにともなって保育者の保育観も変化すると考えられる。それは，幼稚園教諭や保育士として元々持っていたものとは異なる，認定こども園の保育者ならではの保育観へと変化していくのであろうか。あるいは，幼稚園教諭や保育士，いずれかの保育観に近いものへと変化していくようになるのであろうか。また，その変化の幅は，幼稚園教諭として働いてきた者と保育士として働いてきた者とで違うのだろうか。

認定こども園となることで保育の仕方に影響を及ぼすと考えられる要因としては，その保育時間の変化が挙げられる。越中ら[23]は，幼稚園の教育課程に係る標準の教育（保育）時間（4時間）のみの保育を受ける短時間保育児と，それ以上の時間も保育を受ける長時間保育児とについて，これらが混在する認定こども園で働く保育者がどのようなカリキュラムが望ましいと考えているか調査した。その結果，保育所中心の経歴を持つ熟達保育者は短時間保育児と長時間保育児との共通カリキュラムを望む傾向があることを報告した。このことから推測すると，保育所中心の経歴の保育者は幼児の保育時間にかかわらずまとまりを重視した保育をするように変化しているかもしれない。ただし，越中ら[24]の調査があくまで理想とする保育を尋ねていることを考慮すると，現実はその通りでなく，それへの対応で保育の仕方が変わっている可能性も考えられる。つまり，保育所中心の経歴を持つ保育者は，個別性を重視した保育スタイルへと変化している可能性もあるということである。

本研究の目的

そこで本研究では，梶田ら[25]の保育観に関する尺度を援用し，認定こども園への移行によって生じた保育観の変化をとらえることを目的とする。

方　法

調査時期

2008年10月に郵送にて全国の全ての認定こども園へ発送し，同年11月11日までに郵送での返却を求めた。

調査対象者

認定こども園で働いている保育者を対象とした。

材　料

梶田ら[26]の尺度を参考にした。この尺度では，リッカート評定の軸の両極に2つの立場の保育観が書かれている。例えば，一方には「子どもが一生懸命やることよりも，うまくやることを重んずる」，他方には「子どもがうまくなることよりも，一生懸命やることを重んずる」と書かれている。

この梶田ら[27]では，「教師中心―子ども中心」「成果重視―過程重視」「まとまり重視―個性尊重」「男女区別―男女平等」の4因子が抽出された。このうち，「男女区別―男女平等」に関しては認定こども園で働き始めることで変化が見られるとは考えにくいので，今回は考慮しないこととした。また，これらの因子を構成する項目のうち，各因子に対する因子負荷量が.40以上の項目を採用した。ただし，項目中の「教師」という語は「先生」，「子供」という語は「子ども」へと改めた。また，「多くの場面で全ての子どもが同じ経験や活動をするように指導する」「多くの場面でそれぞれの子どもが個性に応じた経験や活動をするように指導する」という質問項目に関しては，より表現を自然なものとするため，「多くの場面で」という語を除くこととした（表1）。

教示文は，「あなたは現在ご自分のクラスで実際にどのような保育や指導の仕方をしておられますか。また，認定こども園となる前にはどのような保育や指導をしておられましたか。以下の記入の仕方を参考にして答えてください。ここには，保育や指導の仕方について異なった意見，A，Bがペアで示されています。あなたの保育や指導の仕方は，A，Bのどちらにより近いでしょうか。なお，初めてのお勤めが認定こども園の方は，現在の保育や指導の仕方のみをお答えください。」とした。また，回答の仕方も，「現在（認定こども園で働き始めて以後）」と「過去（認定こども園で働き始める以前）」とを分けて回答できるようにした。それぞれの回答は，「Aと同じ」（1），「Aにかなり近い」（2），「Aに少し近い」（3），「Bに少し近い」（4），「Bにかなり近い」（5），「Bと同じ」（6）の6段階とした。

なお，本調査は越中ら[28]，越中ら[29]，若林ら[30]，若林ら[31]と同時に行ったものであり，以下の分析での保育経験年数のデータはこの際に収集されたものを用いる。

表1　質問項目（*は左右を逆転させて呈示したもの）

教師中心	子ども中心
*いったん決めたら一貫して指導の計画を実行する	時と場合によって，柔軟に指導の計画をかえる
造形では，先生の意図した考え方やイメージを第一に指導する	造形では，子どもの生み出す発想やイメージを第一に指導する
*ケンカが起きた時は先生が直ちに入って解決する	ケンカが起きた時は子どもに解決をまかせる
*困難な時でも，子どもが最後までねばり強くやり遂げるように静かに見守る	困難な時は，早く，うまくまくやりとげるように積極的に援助する
*造形などでは，はじめに教師がきめこまかく計画し，それにそって指導する	造形などは課題の大枠だけを決め，後は子どもの自発的活動にまかせる
子どもが一生懸命やることよりも，うまくやることを重んずる	子どもがうまくなることよりも，一生懸命やることを重んずる
成果重視	**過程重視**
文字や言葉の学習を積極的にすすめる	文字や言葉の学習は子どもの自然な意欲にまかせる
数の学習を積極的に進める	数の学習は子どもの自然な意欲にまかせる
*音感や情感よりも，言葉や数がわかるように指導する	言葉や数よりも音感や情感を育てるように育てる
ハーモニカ，笛など楽器の演奏がうまくできるように指導する	楽器の演奏よりも，音楽を楽しむように指導する
鉄棒，マットなどの運動がうまくできるように指導する	鉄棒，マットなどの運動では，その活動に興味を持つよう指導する
ワークブックやドリルを使って指導する	子どもの園における日常生活体験を通して指導する
まとまり重視	**個性尊重**
一人一人の子どものペースよりもクラスのまとまりを大切にする	クラスのまとまりよりも一人一人の子どものペースを大切にする
子どもが互いに仲良く，助け合うように指導する	子どもが自分の気持ちや欲求を率直に貫くように指導する
*食事やおやつではクラスが同じペースで残さず，きちんと食べるように指導する	食事やおやつでは一人一人の子どもの好みやペースを大切に指導する
全ての子どもが同じ経験や活動をするように指導する	それぞれの子どもが個性に応じた経験や活動をする
まず子どもが基本的な生活習慣をしっかりと身に付けるように指導する	基本的生活習慣のしつけよりも，まず子どもがのびのびと活動するように指導する
子どもの協調性を育てる	子どもの自律性，独立性を育てる

結　果

アンケートは279園に発送し，86園からの回答があり，407名のデータを得た。このうち，「現在」の項目にしか回答しておらず，保育経験が認定こども園のみであると考えられる37名分のデータ，保育歴の記入が漏れている13名分のデータ，および，回答漏れや，不備がある70名分のデータを以後の分析の対象としないこととした。

各項目の評定値について，逆転項目の得点の大小を入れ替え，各因子のアルファ係数を算出し

た。その結果，現在の指導については，第1因子が.54，第2因子が.76，第3因子が.60であった。過去の指導については，第1因子が.62，第2因子が.80，第3因子が.60であった。

保育経験の長さに基づいて群分けをするため，幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年より長いか，幼稚園での保育歴のみが5年より長いか，保育所での保育歴のみが5年より長いか，幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年以下かで群分けした。その上で，幼稚園と保育所の両方の保育歴の長い保育者は経験施設の差による特徴が出にくいと考えられるため，幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年より長い調査対象者16名のデータを分析の対象としないこととした。一方，幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年以下の保育歴で経験の浅い保育者も施設の差による特徴が出にくく，また保育観の変化があったとしても施設の変化による差というよりも個人の経験による変化である可能性も高い時期であると考えられるが，人数的にも大きな割合を占め，また，基礎的なデータとして報告の価値があると考えられるため，分析の対象とすることとした。その結果，幼稚園での保育歴も保育所での保育歴もいずれも5年以下の保育者（保育歴短者）100名（平均経験年数3.99，*SD*=1.70），幼稚園での保育歴のみが5年よりも長い保育者（幼稚園保育歴長者）99名（平均経験年数15.62，*SD*=7.09），保育所での保育歴のみが5年より長い保育者（保育所保育歴長者）72名（平均経験年数13.06，*SD*=8.89）を分析の対象とした。

群毎に現在の指導と過去の指導について因子を構成する項目の平均評定値を算出した(図1, 2, 3)。1～6の6段階評定なので中央値は3.5であり，これより値が小さい場合，「教師中心」「成果重視」「まとまり重視」の傾向があると言え，逆にこれより大きい場合，「子ども中心」「過程重視」「個性尊重」であると言える。これらの得点に関し2（時期；過去の指導観，現在の指導観）×3（保育歴；保育歴短者，幼稚園保育歴長者，保育所保育歴長者）の2要因分散分析を行った。

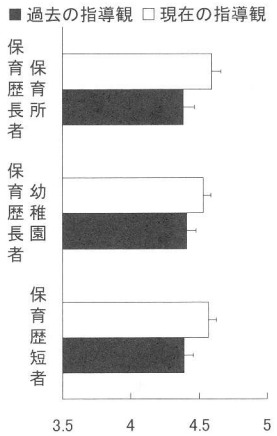

図1 「教師中心－子ども中心」の平均評定値（誤差線は標準誤差）（得点が高いほど「子ども中心」の保育観であることを示す）

教師中心―子ども中心

時期の主効果（$F(1,268)=25.18$，$p<.001$）は有意だったが，保育歴の主効果（$F(2,268)=0.02$. *ns*），およびこれらの交互作用（$F(2,268)=0.55$，*ns*）は有意ではなかった。したがって，全ての保育者が認定こども園で働くようになり，より「子ども中心」の保育観へと変化したと言える。

成果重視―過程重視

時期の主効果（$F(1,268)=6.71$，$p<.05$）は有

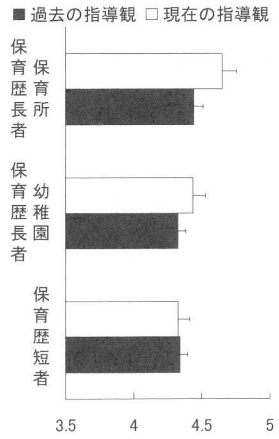

図2 「成果重視－過程重視」の平均評定値（誤差線は標準誤差）（得点が高いほど「過程重視」の保育観であることを示す）

意であり，保育歴の主効果（$F(2,268)=1.62$. ns）が有意ではなく，これらの交互作用は有意傾向であった（$F(2,268)=2.68$, $p<.10$）。交互作用は有意傾向であったが，下位検定として単純主効果の検定を行ったところ，過去の指導観における保育歴の単純主効果は有意ではなかった（$F(2,268)=0.38$, ns）。一方，現在の指導観における保育歴の単純主効果が有意であった（$F(2,268)=3.55$, $p<.05$）。LSD 法による多重比較（5％水準）を行ったところ，保育歴短者と比較して保育所保育歴長者の平均評定値が高く，「過程重視」であると言える。さらに，主検定に合わせて危険率を 10％まで考慮すると，幼稚園保育歴長者と比較して保育所保育歴長者の平均評定値が高い傾向があり，「過程重視」であると言える。また，保育歴短者における時期の単純主効果（$F(1,99)=0.05$, ns）は有意ではなかったが，幼稚園保育歴長者における時期の単純主効果（$F(1,98)=4.14$, $p<.05$），保育所保育歴長者における時期の単純主効果（$F(1,71)=5.74$, $p<.05$）は有意で，いずれも過去の指導観と比べて現在の指導観の平均評定値が高く「過程重視」のものへと変化したと言える。

まとまり重視―個性尊重

時期の主効果（$F(1,268)=4.73$, $p<.05$），保育歴の主効果（$F(2,268)=4.39$, $p<.05$），およびこれらの交互作用（$F(2,268)=3.68$, $p<.05$）が有意であった。交互作用が有意だったので下位検定として単純主効果の検定を行ったところ，過去の指導観における保育歴の単純主効果（$F(2,268)=2.34$, $p<.10$）は有意傾向であった。LSD 法による多重比較（5％水準）を行ったところ，保育歴短者と比較して幼稚園保育歴長者の平均評定値が低く，また，保育所保育歴長者と比較して幼稚園保育歴長者の平均評定値が低く，より「まとまり重視」であると言える。一方，現在の指導観における保育歴の単純主効果（$F(2,268)=6.14$, $p<.01$）が有意であった。

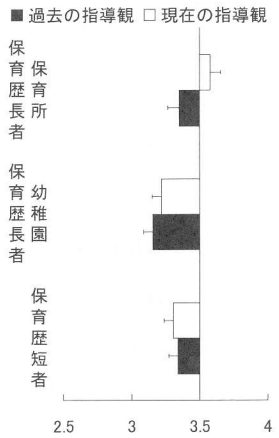

図3 「まとまり重視－個性尊重」の平均評定値（誤差線は標準誤差）（得点が高いほど「個性尊重」の保育観であることを示す）

LSD 法による多重比較（5％水準）を行ったところ，保育歴短者と比較して保育所保育歴長者の平均評定値が高く，また，幼稚園保育歴長者と比較して保育所保育歴長者の平均評定値が高く，より「個性尊重」であったと言える。また，保育歴短者における時期の単純主効果（$F(1,99)=0.36$, ns），および幼稚園保育歴長者における時期の単純主効果（$F(1,98)$, 0.89, ns）は有意ではなかったが，保育所保育歴長者における時期の単純主効果（$F(1,71)=7.73$, $p<.01$）は有意で，過去の指導観と比べて現在の指導観の平均評定値が高く，「個性尊重」の方向へと変化したと言える。

考　察

幼保一体化施設として始まった認定こども園について，認定こども園で働くようになるまでの保育歴によって保育観の変化に差があるのかを検討するため，認定こども園で働き始める前後での保育観の変化について調査した。

「教師中心－子ども中心」の対立軸で見る保育観については，保育歴にかかわらず，過去の保育観と比較して現在の保育観が「子ども中心」の保育観へと変化したことが分かった。梶田ら[32]では，保育歴 10 年～15 年の保育者が他の保育歴の保育者と比べて「子ども中心」の保育観であった。梶田ら[33]は横断的な研究であり，本研究は回想的な研究であるので，両者を一概に経験年数による変化として比較することは出来ないかもしれないが，本研究において保育歴が平均 15.62 年の幼稚園保育歴長者や平均 13.06 年の保育所保育歴長者が「子ども中心」の保育観へと変化したのは，認定こども園で働き始めた前後がちょうど「子ども中心」の保育観へとシフトする時期と重なったことが原因とも考えられる。ただ，保育歴短者も「子ども中心」の保育観へと変化しているため，このことだけで保育観の変化を説明することは出来ない。やはり，認定こども園で働き始めることが「子ども中心」の保育観へと変化に影響を与えた部分もあるのであろう。認定こども園で働き始めたことで保育に欠ける子どもと欠けていない子どもとが混在する等，多様な状況下の子どもへの保育を行うようになったため，教師主導の保育ができなくなり，「子ども中心」の保育観を持つようになったのだと考えられる。

一方，「成果重視－過程重視」の対立軸で見る保育観については，幼稚園保育歴長者も保育所保育歴長者も過去の保育観と比較して現在の保育観が「過程重視」の保育観へと変化したことが分かった。また特に，保育所保育歴長者は保育歴短者や幼稚園保育歴長者と比較してより「過程重視」の保育観であることも分かった。幼稚園保育歴長者や保育所保育歴長者は保育歴が長く，幼稚園や保育所での生活形態を熟知していたため，認定こども園で働くようになって保育時間の異なる幼児を同一の生活形態に適応させざるを得ない状況となり，到達目標を設定して全員が一定の成果を出すような保育が現実にそぐわないと感じるようになったのかもしれない。そのた

め，より個のペースに合わせて成長の見守りをする必要があると考え，興味や意欲を育む「過程重視」の保育観を持つようになったのだと考えられる。その中でも特に保育所保育歴長者は，これまでも保育所で遅くまで残る子どもと早く帰宅する子どもが混在する中で保育を行ってきており，保育所よりも短時間保育児の割合が多い認定こども園ではより「過程重視」の保育観を持つようになったのかもしれない。

「まとまり重視－個性尊重」の対立軸で見る保育観については，過去の保育観については幼稚園保育歴長者がもっとも「まとまり重視」の保育観であり，一方，現在の保育観については保育所保育歴長者がもっとも「個性尊重」の保育観であることが分かった。この「まとまり重視－個性尊重」の平均評定値はいずれも評定値の中央値付近に平均評定値がプロットされ，保育者にとって集団生活を学ぶ「まとまり重視」の保育観と，個を大切にする「個性尊重」の保育観はどちらを重視すべきか判断しづらいものであると考えられる。その中で，幼稚園保育歴長者は過去の保育観が他の保育者よりも「まとまり重視」であり，また，現在の保育観も，保育歴短者と同様，保育所保育歴長者よりも「まとまり重視」であった。このことは，幼稚園が保育所と比して教育面を重視してきたため，幼稚園保育歴長者は認定こども園が保育所化することへの危機感から一貫して「まとまり重視」の保育観となったのかもしれない。一方，保育所保育歴長者は過去の保育観は「まとまり重視」であったが，現在の保育観は「個性尊重」へと変化した。このことは，保育所保育歴長者は，保育に欠ける子どもたちに基本的生活習慣や人間関係，様々な身体的・社会的スキルなど多様な発達を援助することに重点を置いてきたが，認定こども園で働き始めたことで以前よりも養育環境や保育時間の異なる乳幼児が混在する中で保育をするようになり，それぞれの子どもの状態に応じて保育の仕方を変えるといった方向へシフトしてきている可能性が考えられる。

以上，本研究では認定こども園で働き始めた保育者の保育観の変化について検討した。越中ら[34]によれば，保育所中心の経歴の保育者は短時間保育児と長時間保育児とで共通カリキュラムを望む傾向があるとされたが，本研究の結果からはこれはあくまで理想であり，保育所保育歴長者が実際に保育を行っていく上での保育観という面では，「まとまり重視」の保育観から「個性尊重」の保育観へと変化していると分かった。もちろん，本研究の結果はあくまで保育者自身による現在の保育観の自己評定と過去の保育観の回想による自己評定との比較に過ぎず，実際に保育実践がどのように変化したかまでは明らかに出来ていない。このことを検証するためには，認定こども園へ移行する前後の保育実践を観察し，比較する必要があるだろう。また，調査を実施する行う上では認定こども園となる前後で保育観を比較するよう説明したが，保育観の変化は子ども達や社会的環境の変化変化によって引き起こされた可能性もある。したがって，現在も幼稚園や保育所で働く保育者を対象に，現在の保育観と回想による過去の保育観との比較を求める調査も実施すべきであろう。この結果と本研究の結果とを比較することで，認定こども園への移

行こそが保育観の変化の原因となったものが何かをより厳密に同定することが出来よう。

このほかにも，本研究の結果には多様な解釈の可能性がある。しかし，認定こども園という新しい施設への移行が始まった時期に保育者の保育観の変化を検討したことは意義深いことだろう。幼稚園での保育歴の長い者や保育所での保育歴の長い者が混在して働いている現在は，それぞれの保育者がそれぞれの経験に基づき認定こども園で働く上での保育観を形成しつつあるところだと考えられる。いずれはその経歴にかかわらず，認定こども園に対応した保育観へと収斂されていくものと考えられるが，それが子どもの最善の利益を追求するものとなっていることを確認していくことが必要であり，我々研究者の務めであると言えよう。

引用文献

1）堀憲一郎（2006）保育専攻学生はどのような保育観を持っているのか．下関短期大学紀要 24．25-41

2）小倉定枝（2001）保育者を目指す学生の保育観――実習簿の記述から読み取れるもの――．日本保育学会大会第 54 回研究論文集．614-615

3）梶田正巳・後藤宗理・吉田直子（1984）幼児教育専攻学生の「個人レベルの指導論」の研究．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）31．95-112

4）星野英五（1998）保育科学生の保育観・保育者観形成について――子ども観との関連から――．日本保育学会第 51 回大会研究論文集．792-793

5）増田公男・宮沢秀次（2007）保育者養成課程大学生の保育観・子ども観に関する縦断研究．日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集．236

6）増田公男・宮沢秀次（2008）保育者養成課程大学生の保育観・子ども観に関する縦断研究Ⅱ．日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集．122

7）大滝まり子・戸田まり・佐藤信雄（2003）幼児教育学科学生の保育者観，子ども観と自己認識(2)．北海道文教大学短期大学部研究紀要 27．77-85

8）邨橋雅広・鍛冶則世・浅川潔司・横川和明（1989）幼稚園教諭の保育観に関する研究(1)．日本保育学会第 42 回大会研究論文集．722-723

9）鍛冶則世・邨橋雅広・浅川潔司・横川和明（1989）幼稚園教諭の保育観に関する研究(2)．日本保育学会第 42 回大会研究論文集．724-725

10）杉村伸一郎・朴　信永・若林紀乃（2006）保育者省察尺度に関する探索的研究(2)――省察の 3 層モデルによる検討．広島大学心理学研究 6．175-182

11）杉村伸一郎・朴　信永・若林紀乃（2007）保育者省察尺度に関する探索的研究(1)――保育現場における反省的実践――．幼年教育研究年報 29．5-12

12）石川久恵（1989）保育における行動評価の研究(1)――保育者の保育観調査を中心に――．日本保育学会大会研究論文集 42．754-755

13）中　俊博（1996）保育者の保育観――幼稚園と保育所の比較から見た――．和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 6．129-142

14）上田敏丈（2002）保育者の保育スタイルに関する研究．中国四国教育学会教育学研究紀要 48．547-548

15) 上田敏丈（2003） 保育者の Teaching Styles に関する研究―構造・非構造場面の違いに着目して．中国四国教育学会教育学研究紀要 49．400-405
16) 上田敏丈（2004） 幼稚園教諭の Teaching Style 変容に関する予備調査．中国四国教育学会教育学研究紀要 50．255-260
17) 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子（1985） 保育者の「個人レベルの指導論（PTT）」の研究――幼稚園と保育所の特徴――．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）32．173-200
18) 梶田正巳・杉村伸一郎・桐山雅子・後藤宗理・吉田直子（1988） 具体的な事例へ保育者はどう対応しているか．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）35．111-136
19) 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子（1990） 保育観の形成過程に関する事例研究．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）37．141-162
20) 吉岡一志（2007） 保育士の成長を支える信念の形成過程――ある保育士のライフヒストリーを中心に――．広島大学大学院教育学研究科紀要 56．101-108
21) 前掲（17）
22) 前掲（13）
23) 越中康治・若林紀乃・松井剛太・樟本千里・藤木大介・上田七生・長尾史英・山崎　晃（2009） 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る(4)．日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集．688
24) 前掲（23）
25) 前掲（17）
26) 前掲（17）
27) 前掲（17）
28) 越中康治・若林紀乃・松井剛太・樟本千里・藤木大介・上田七生・長尾史英・山口圭介・米谷光弘・山崎　晃（2009） 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る(2) ――カリキュラムに関する管理者と保育者の認識について――．日本保育学会第 62 回発表論文集．39
29) 前掲（23）
30) 若林紀乃・越中康治・松井剛太・樟本千里・藤木大介・上田七生・長尾史英・山口圭介・米谷光弘・山崎　晃（2009） 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る(1) ――カリキュラム作成の実態について――．日本保育学会第 62 回発表論文集．38
31) 若林紀乃・越中康治・松井剛太・樟本千里・藤木大介・上田七生・長尾史英・山崎　晃（2009） 認定こども園の取り組みの現状とこれからの方向を探る(3)．日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集．942
32) 前掲（17）
33) 前掲（17）
34) 前掲（23）

付　記

本研究は平成 19-21 年度科学研究費補助金（種目：基盤研究（C），研究課題番号：19530493，研究題目：乳幼児の発達における児童福祉施設の役割と保育カリキュラムに関する研究，代表者：山崎　晃）による助成を受けて行ったものの一部である。